

## はじめに

**司会（田家専務理事）** 第2回の農業研究所の講演会を開催したいと思います。  
本日は、兵庫県豊岡市の中貝宗治市長をお招きいたしております。中貝市長は、市長のリーダーシップの下に、「コウノトリ悠然と舞うふるさと」を基本理念として、国際的な視点で見据えながら地域づくりに取り組んでおられる、極めて貴重な実践をされています。では、市長、よろしくお願いいたします。

**中貝** 皆さん、今日は。今日は、貴重な機会を頂きまして、有難うございます。今から、コウノトリをめぐる豊岡の長い長い物語をお話しさせていただきます。少しでも皆様のご参考になればと願っております。豊岡は、兵庫県の北部、日本海に面したまちです。平成17年（2005年）に1市5町が合併して現在の豊岡市になりました。

11月6日、いよいよズワイガニが解禁いたします。豊岡では、津居山という小さな港からカニが揚げられますので、「津居山かに」と呼んだりします。これと同じものが越前で揚げられますと越前ガニになったりいたします。とてもおいしいカニですので、ぜひお越しください。城崎温泉も豊岡です。もうすぐ秋祭りです。伝統をととても大切にしているまちです。竹野も豊岡です。「快水浴場百選」に選ばれた、とても美しい渚のあるまちです。ここにワンちゃん専用のビーチがありまして、しかも、このワンちゃんは、海から上がると温泉に入ることができますので、トローンとした顔をしております。神鍋高原もあります。日高というところです。これが神鍋高原ですが、2万年前に噴火してできた山です。それを今、冬はスキー場として利用しております。小京都・出石もあります。ここも伝統をととても大切にしているまちです。山間に行きますと、但東という地域がございます。ここは、オオサンショウウオ、世界最大の両生類が大量に生息しているところです。つまり、豊岡の上流域がいかに豊かであるかということこの生き物は示しています。

農家民宿も盛んです。東京にもおいしいものが一杯ありますが、豊岡にはもっと負けないぐらいございますので、ぜひお越し頂きたいと思います。豊岡にコウノト

り但馬空港という小さな空港がございまして、1日2往復しか飛んでおりませんが、伊丹空港経由で羽田空港から最短2時間10分で豊岡にお越し頂くことができます。

## 1 豊岡はどのような道を歩むのか

さて、豊岡はどういう道を歩むのか、歩んできたのか。私は市民にこのように言っています。「小さな世界都市」を目指す。世界都市というのは、例えば東京やパリ、ロンドン、ニューヨークなど、超大都市を念頭に置きます。しかし、「小さな」という言葉が付いています。人口規模は小さくても、世界の人々に尊敬され、尊重されるまちを「小さな世界都市」と呼んで、その実現を目指しています。企業でも、例えばトヨタのような大企業もあれば中小企業もあって、小さくても世界の中でさん然と輝いている企業があります。自治体だって同じことが可能なはずだと思っています。

これを実現するために、5つの道筋があります。これを全部やる必要があります。まず、1つは、受け継いできた大切なものを守り、育て、引き継ぐ。豊岡の固有性に着目したまちづくりを進めるというのが1つ。2つ目は、シリコンバレーの向こうを張っているのですが、環境都市・豊岡エコバレーを実現する。これは、後ほどお話ししますコウノトリを通じて、豊岡が優位性をもっている分野だということです。3つ目、「小さな世界都市」にふさわしい市民を育てる。4つ目、情報発信戦略を進める。そういうまちがあることをちゃんと知って貰う。5つ目、「わかった。行こうか」という方のために、容易に豊岡にお越しいただけるように交流基盤である。道路や鉄道、空路などを整備していく。この5つのすべてをやろうと。今日は、そのうちの最初の4つについて、豊岡の取組みをお話いたします。

## 2 受け継いできた大切なものを守り、育て、引き継ぐ

まず、「受け継いできた大切なものを守り、育て、引き継ぐ」ということです。日本中、これとは全く別の道を歩んできました。受け継いできた大切な自然を壊し、歴史や伝統を捨て去り、古い町並みを壊して、比喩的にいうと、四角いコンクリートの建物ばかりの同じ顔をしたまちをつくってきました。顔が同じなら、体が大き

い方が勝つに決まっています。豊岡のような小さな地方都市は、例えば、東京など大資本のある都市に勝つことは絶対できない。東京には資本力があって、絶えず、少し古くなったものを壊して、新しいものをつくって、新しいものの刺激でまちの魅力をつくることができます。私たちは、そんなことは望むべくもありません。別の道を歩む必要がある。

具体例です。これは<sup>註</sup>豊岡を空から見た写真です。これは豊岡の中心市街地で、これは市役所です。まちの真ん中を円山川が流れています。1925年（大正14年）、豊岡は北但大震災でペしゃんこになって、火が出て灰になりました。その復興のシンボルとしてできたのが旧豊岡町の役場です。昭和2年（1927年）にできました。当時としては珍しい鉄筋コンクリートの建物でありました。その後、合併によってまちが大きくなったので、3階を継ぎ足して3階建ての庁舎になりました。私の前任の市長が白く塗れとって、ホワイトハウスになりました。もう八十数年経ちましたので、新しい庁舎をつくることになりました。この庁舎をどうするかという激論をいたしまして、残すことにいたしました。これは今年の2月の写真です。1日5メートルずつ、5日間で25メートル、庁舎を前へ移動させました。大雪警報の中をスタートいたしました。重さが3,000トンありまして、横綱白鵬2万人を運んだ勘定になります。滅多にないことですので、建築をやっている技術者、あるいは学生たちにも公開して、このプロセスを見て頂きました。行き過ぎたらどうしようかと思いましたが、ちゃんと止まります。来年完成するのですが、動かした後には7階建ての庁舎を建てて、全体として市役所としての役割を果たします。2階は議場にいたします。こんなものはさっさと壊してしまえという議論がありました。しかし、現在の本庁舎は、あの大震災というとんでもない災害に、当時の豊岡の人々がどのように向き合ったのか、立ち上がってきたのか、その歴史と豊岡の人々の姿勢を体現している建物です。壊してはならないということで残すことにいたしました。

-----  
注) 本文中のアンダーラインの「これは」等は、演者が講演資料としてビデオ映像及びパワーポイント資料を使われ、それらの該当箇所を指しながら説明されたことによります。

なお、この講演資料は、掲載スペースの都合上演者のご了解を得て、割愛しております。以下同様。

城崎温泉です。ここも同じように北但大震災でやられています。直前、大正時代の城崎の写真です。木造3階建ての旅館街でありました。同じ場所です。ここから城崎の復興が始まります。まず、彼らは用地を1割、無償で提供して、川幅を広げて、道路幅を広げて、広い防火帯をつくりました。そして、まちの要所要所に鉄筋コンクリートの建物を配置しました。将来、また火が出ても、必ずここで食い止める「火伏せ壁」といいますが、その理念で、要所要所に鉄筋コンクリートの建物をつくりました。その上で、復興のコンセプトはこれです。元に戻す。木造3階建ての旅館街を再現いたしました。当時、兵庫県は、洋風の建築物で復興することを旧城崎町に提案しました。旧豊岡市はそれを受け入れて、先ほどの庁舎をつくりました。しかし、城崎は、每晚のように議論して、最後は反対いたします。洋風の建築物は城崎の情緒に合わない。兵庫県の提案を撤回させて、木造3階建ての旅館街を復元されました。これは同じ場所なのですが、木造3階建ての旅館の竣工式のときの写真です。今、こんな感じですよ。皆さんの運がよければ、こんな素敵な女性と会うことができるかもしれません。若い方が良いという方にはこんな写真も用意いたしました。これが夜の城崎の風景です。「ロンリープラネット」という英語圏で出ている観光のガイドブックがあります。その日本編の中に「JAPAN'S BEST ONSEN 12（日本のベスト温泉12）」があります。例えば大都会の温泉ベストはここ、田舎の温泉ベストはこことあるのですが、その中のベスト温泉タウン、最高の温泉街は城崎だと書かれています。そして、ベスト温泉旅館は城崎の西村屋本館だと書かれています。つまり、もしあの日、城崎が洋風建築物で復興していたとすると、こんな評価は恐らくなかったらうと思います。2010年、日本経済新聞社が「そぞろ歩きが楽しい温泉街ランキング」の発表をしました。1位は、堂々、城崎温泉でありました。今、特にヨーロッパ、アメリカからのお客様が増えてきています。長い時間とお金をかけて、わざわざ日本に来て、洋風の建築物を見たい人はいません。つまり、あの日、城崎の復興戦略が今日の繁栄に繋がっていると私は思います。

小京都・出石も豊岡にあります。江戸時代の情緒を色濃く持ったまちです。国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。23ヘクタール（23万平方メートル）が伝統的な場所として指定されています。江戸時代のような顔をしています。実は、大半は明治につくられたまちです。明治9年の大火事で、中心市街地の3分

の2が焼失しました。そこから出石の復興が始まります。しかし、当時の出石の人々は、この際、新しいものをつくろうとはしませんでした。町割りといって、道路や堀といった構造で身分上の住み分けをしておりましたが、それはそのまま残しました。そして、町家を再建するときに、江戸時代の建築様式を使いましたので、大半は明治につくられたまちでありながら、江戸時代との連続性を非常に強く持ったまちとして今日に至っています。そこに、近畿に現存する最古の芝居小屋がありました。45年ほど前に閉館になっておりました。1901年（明治34年）につくられた芝居小屋です。これを復活させました。個人の所有であったのですが、建物を市が無償で譲り受けて、土地は買収して、一度、全部部材を外して、どうしても腐って駄目なところだけ新しい木に置きかえて再現しました。そして、歌舞伎でこけら落としをいたしました。今年も11月4日から9日の間、歌舞伎をいたします。350席の小さな芝居小屋ですので、この距離で役者を見ることができます。これは、閉館された45年前のままの看板。今でも半分はまだ営業しておられます。これが今年のチラシです。これも、出石が自分たちの町並みを失ったときに、もう一度、それを復活させている。自分たちは大切なものを持っていた。それが失われてしまった。何の迷いもなく、元に戻す。もちろん、新しい工夫は加えているのですが、コンセプトとしては、連続性をすごく大切にしたいということが言えます。

### 3 環境都市「豊岡エコバレー」を実現する

「小さな世界都市」を実現するための2つ目の柱がこれです。環境都市「豊岡エコバレー」を実現する。もう一度、豊岡を空から見た写真です。今、私が光で指しております画面中央部、円山川の河口から約10キロメートル上流になりますが、カレイが釣れます。アジが釣れます。円山川の河川勾配は1万分の1です。10キロメートル上流に行って高低差1メートル、100メートル上流に行って高低差わずか1センチメートル。ほとんど水平状態の川です。川底には海の水が忍び込んでいます。風がないと、このように、鏡の面のように美しい水面を見せてくれます。しかし、河川勾配が極端に小さいということは、水はけの悪さを意味します。2004年の10月、豊岡は台風23号によって泥の海に沈みました。このように大雨がちょっと降ると水

浸しになりやすい場所を低湿地帯と言います。人間が住む上で結構厄介な場所です。ところが、その厄介な低湿地帯、あるいは湿地が大好きな生き物が沢山います。今から、湿地や低湿地が大好きな生き物の豊岡の代表例を2つごらん頂きます。この人ではありません。こっちです。

コリヤナギと呼ばれる種類の柳です。湿地を好む植物でありまして、円山川の氾濫がつくり出す湿地に自生しておりました。このコリヤナギを使ってできたのが柳行李です。豊岡は、江戸時代、日本最大の柳行李の産地でありました。先ほどの女性は、この柳行李をつくる伝統工芸士の方です。生活様式の変化に合わせて持ち手をつくるとかばんに変わりました。今、豊岡は、革以外のかばんでは、日本の7割を生産する日本最大のかばんの産地になっています。これは、I Fデザイン賞というドイツの世界最高峰の賞をとったかばんですが、最近は、こんなおしゃれなバッグ、オリジナルなバッグも豊岡でできるようになりました。

もう一つ、湿地が大好きな豊岡の生き物の代表例がコウノトリです。羽を広げると2メートルもある白い大きな鳥です。かつては日本の各地で見られる鳥でした。江戸時代、幕末に、シュリーマンというトロイ（トロイア）遺跡を発掘した人物が日本に来ておりまして、浅草の浅草寺観音堂の屋根にコウノトリが巣をつくっていたという記録を残しています。日本の各地で見られる鳥でした。元々は、シベリア・アムール川、中国では黒竜江と言いますが、その流域で繁殖して、冬は南で越冬いたします。その途中で日本にもやってきた鳥でした。そのまま帰るものもいれば居つく鳥もいて、日本では留鳥となった鳥です。このように、里山の大きな松の上に巣をつくって、周辺の田んぼや川の浅瀬でえさをとっていました。カエルやナマズやドジョウやフナ、蛇も食べます。完全肉食の大型の鳥です。今でこそ田んぼは、機械が入りやすいように必要なとき以外は乾田になっておりますが、少し前の日本の田んぼはこのようでした。どこが水路か水田かわからない。というか、そういう湿地帯に田んぼをつくってきた。豊岡でも、胸までつきりながら田植えをしたという田んぼが結構ありました。日本中、こんな風景はざらでありました。そして、こういうところですから、一年じゅうカエルやナマズやドジョウやフナがおりますので、コウノトリにとっては格好のえさ場でありました。

ところが、明治になって鉄砲が解禁されて、まず、狩猟で数を減らします。第二

次世界大戦中、松の根っこから油をとるということで、大量に松林が伐採されて、ねぐらを追われ、最後は、戦後の環境破壊によって数を減らして、1971年、日本の野生最後の1羽が豊岡で死んで、コウノトリは日本の空から消えました。とどめを刺したのは農薬です。コウノトリのえさになる生き物はみんな死んでしまいました。コウノトリがえさを食べると、フナやナマズやドジョウの中には農薬が入っていましたので、コウノトリの体内に農薬が蓄積して行って、コウノトリは内部から健康を害していきます。そして、1971年、絶滅してしまいます。絶滅の前に、コウノトリを守ろうという運動が豊岡で起きて、1965年、飛んでいた鳥を捕まえて人工飼育が始まりました。トキよりも2年早い人工飼育の開始でした。しかし、最初の24年間、来る年も来る年も1羽のヒナもかえりませんでした。これが最初のころの人工飼育の現場です。この飼育一筋にやってきた飼育員の松島興治郎さんがこんなことを言っています。「昭和50年代の初めには、コウノトリの繁殖は絶望視されていました。それでも毎日飼育を続けました。なぜ続けていったのかと聞かれても答えようがありません。暗やみの中をひたすら飼育し続けたのです」。

転機は1985年に起きます。ロシア・ハバロフスクから6羽の幼い鳥が豊岡に送られてきて、当時、兵庫県から飼育を委託されていた豊岡市役所の職員が懸命に育て、カップルができて、平成元年（1989年）、人工飼育の開始から実に25年目の春、待望のヒナが誕生いたします。以来24年連続でヒナがかえって、今、161羽のコウノトリが豊岡とその周辺で暮らしています。そのうち99羽が鳥かごの中で暮らし、62羽が再び自由に空を飛び回っています。野生での絶滅から41年、人工飼育の開始から47年、豊岡で保護活動が明確な形をとってから57年になります。長い時間と膨大なエネルギー、沢山のお金が必要でした。これからも恐らくそうだろうと思います。

では、なぜ、それほどまでにして豊岡はコウノトリを空に帰そうとするのか。狙いが大きく3つあります。1つは、人間とコウノトリとの約束を守ろうということです。47年前、飛んでいた鳥を捕まえて鳥かごに閉じ込めました。安全なえさを与えて行って、いつか増えたら、また空に帰そうと当時の人々は誓いました。言うなれば、人間はコウノトリと約束をした。私たちは、約束を守って、もう一度、コウノトリを本来の場所に帰さなければなりません。2つ目は、絶滅寸前の野生動物の

保護に関して、世界的な貢献をしようというものです。くちばしの黒い極東のコウノトリは、世界中合わせても約3,000羽。ヨーロッパにはくちばしの赤い別の種のシュバシコウと呼ばれるコウノトリがいます。80万羽以上いるといわれて、特に問題ありません。しかし、極東のコウノトリは絶滅寸前です。その保護に関して、世界的な貢献をしようというのが2つ目。3つ目、今度は観点を変えます。コウノトリも住める環境とはどういう環境なのかということに関わります。コウノトリは完全肉食の大型の鳥です。あんな鳥でもまた野生で暮らすことができる」とすると、そこには膨大な量の、そして、沢山の種類の生き物が存在するはずで、そのような豊かな自然は、人間にとっても素晴らしい自然なのではないか。もう一つあります。どんなに自然が豊かになって、えさが豊富になったとしても、飛んできた鳥をやみくもに撃ち殺すような文化のところではコウノトリは暮らすことはできません。あんな鳥も自分たちの近くにいっても良いというおおらかな文化が人間の側になければならない。そこで、コウノトリを空に帰そうということを合い言葉にして、コウノトリも住めるような豊かな環境、すなわち、豊かな自然環境と豊かな文化環境をもう一度取り戻そうというのが3つ目の、そして最大の狙いです。

それを実現するために、色々なことをやってきました。1999年に、兵庫県は豊岡市内に165ヘクタール（50万坪）の用地を買い求めて、県立のコウノトリの郷公園をつくりました。そこに県立大学の研究所を置いて、野生化の研究と実践が進められています。この辺で飼育しています。その一角を市がお借りして、コウノトリ文化館を設置し、普及啓発を行っています。このように間近でコウノトリをご覧頂くことができます。ビオトープ水田。ビオトープのビオはバイオで生き物、トープは場所をさし、生き物が住む場所を意味します。休耕田を利用して、一年中水を張って、草の管理をします。生き物がワッとわいてきて、豊岡の環境が良くなります。そして、コウノトリのえさ場にもなります。子供たちの環境学習の場にもなります。市内にこういった水田が12ヘクタール（12万平方メートル）あります。

農薬に頼らないコウノトリを育む農法。無農薬と、75%農薬をカットした減農薬とありますが、今年度、251.6ヘクタールまで広がってまいりました。これは、除草対策として、米ぬかをまいているときの写真です。冬に水を張って頂いています。普通はそんなことしません。畔が緩みます。ところが、アカガエルは2月から3月

ごろに卵を産むカエルです。アカガエルの産卵場所を増やそう。カエルはもちろん、コウノトリのえさにもなります。中干しといいまして、豊岡では6月ごろに田んぼから一度、全部水を抜きます。大量のオタマジャクシ、ヤゴが干からびて死んでしまいます。農家をお願いして、中干しを約1月後ろへずらして頂きました。この間にオタマジャクシはカエルに変わり、ヤゴはトンボに変わり、水がなくなっても逃げることができる。こういった水田が137ヘクタールあります。水田魚道。水はけを良くするために、田んぼと水路にこんな落差をつくってしまいました。生き物が行き来できなくなりました。そこで、兵庫県と豊岡市が費用を折半して水田魚道をつくっています。こんな急な魚道であります。ドジョウやカエル、ナマズ、エビが行き来していることがこれまでの調査でわかっています。河川と水路との連続性も断ち切られていました。先ほどの段差をなくして、川から水路、そして田んぼへとといった連続性を回復させました。例えば、ナマズは川から水路を伝って田んぼに入って、昔は、そこで卵を産んでおりました。田んぼの水は暖かくて気持ちがいい。流れがないので安全だ。稚魚は少し大きくなると、今度は田んぼ、水路、川へと帰っていくという循環があった。それを取り戻してまいりました。国土交通省も頑張っておりまして、河川敷を浅く掘って湿地に再生することをやっています。これまでに、円山川の湿地再生で、新たに125ヘクタール（125万平方メートル）の湿地が国土交通省によって再生されています。

もちろん、人の心も大切でありまして、情緒に訴えようということです。これは、中貝という人が乗っている市長公用車ですが、ここにコウノトリ。大阪と城崎温泉に行き来している民間のバス会社ですが、コウノトリ。コウノトリのミュージカルもできました。さらに久々比神社。久々比は、古い言葉でコウノトリを指す。コウノトリ神社もありまして、ちゃんと絵馬もお守りもあります。

こういった努力を重ねてまいりまして、2005年の9月24日、続々と人々がコウノトリの郷公園の周りに集まってまいります。そして、歴史的瞬間がやってまいります。このとき、野生での絶滅から34年が経過していました。最初の1羽が飛んだときに、「やった！」という大きな声がしました。それは私の声でありました。そして、その2年後、2007年の5月20日、日本の野外で43年ぶりにヒナがかえり、47年ぶりに巣立っていきました。

物語はさらに続きます。これは、城崎温泉のちょっと上流側にある円山川の「ひのそ島」です。水の流れを阻害していました。台風のときには、一刻も早く水を海に流したい。全島掘削の計画が上がりました。でも、自然も大切だ。いやいや、治水の方が大切だ。折り合いがつかしました。半分だけ川底まで掘削がなされ、半分は水ひたひたのところまで掘削がなされました。こんな感じです。ちゃんとコウノトリはやってきて、えさ場として利用するようになりました。これは、戸島というところの田んぼです。城崎温泉の円山川の対岸にあります。大変なジル田でした。田植えをするために足を入れると、ズブズブズブと膝まで浸かってしまう。機械を入れることができませんでした。「嫁殺しの田んぼ」と呼ばれていました。こんな田んぼは嫌だということで土地改良の工事が始まりました。その工事の順番を待っている間、休耕にしていたところ、2005年の夏、このように草が生えて、ミズアオイ、絶滅危惧種の植物が一斉に花を咲かせました。そして、同じ2005年の夏、大陸からやってきた1羽の野生のコウノトリが毎日のようにやってくるようになりました。

サギのえさを横取りしようとして失敗した写真です。放っておきますと、この美しい光景は未来永劫失われてしまいます。守ってほしいという声が市民から上がりました。そこで、豊岡市が農家と話をし、4ヘクタールの農地を確保して、兵庫県と工事を折半して湿地公園にしました。先ほどのコウノトリは8月5日に豊岡に来たところから、ハチゴロウという名前で親しまれていました。ハチゴロウは4年半いた後、死んでしまいます。ハチゴロウがこの場所の大切さを教えてくれた。その感謝の気持ちを未来永劫伝えようということで、私たちは条例上も正式に、この湿地公園の名前を「ハチゴロウの戸島湿地」と名付けました。ここでは5年連続ヒナがかえり、5年連続で巣立っています。

その近くに、田結という海辺の小さな村があります。そこにもコウノトリが時々行くようになりました。村人たちはもっと長くいてほしいと願いました。そこで、みんなで力を合わせて、先祖伝来の田んぼを湿地に変えてしまいました。コウノトリがしばしばやってくるようになり、村人たちは大喜びです。そして、この村にあった民宿にはお客さんが増えて、それでハッピーである。こんなことになっています。円山川、日本海、城崎温泉、ハチゴロウの戸島湿地がここです。田結はこの辺りです。

今年の7月、ルーマニア・ブカレストでラムサール条約のCOP11、第11回の締約国会議がありました。国際的に重要な湿地を守ろうというのがこの条約の趣旨です。円山川とその周辺水田、下流域とその周辺水田はちゃんと認定を受けました。これはラムサール条約の事務局長です。うれしそうな顔をしております。そして、同じ会期内に、世界湿地ネットワークという国際的なNGOが主催しております Wetland Globe賞を円山川が受賞しました。これは、湿地保全管理の最良の実践例を大陸ごとに、4年ごとに表彰するというものでありまして、円山川の取組みがアジアの代表例として賞を受けました。

1960年、52年前、豊岡市内で撮られた写真です。朝、子供たちが田んぼ道を学校へ行こうとしています。2羽のコウノトリがここにおいて、あたかも「行ってらっしゃい」と言わんばかりに子供たちを見送っています。1960年、52年前の写真です。2006年の写真です。50年経って、またあの光景が戻ってきました。最近の写真です。農家の方とコウノトリ、よく似ています。後ろは特急「こうのとり」です。こんな写真もあります。今や、コウノトリの郷公園はカップルのメッカになりつつあります。豊岡で生まれた、あるいは放鳥したコウノトリは大変な冒険家でありまして、これまでに確認されているだけで、33府県、117市町村に飛び回っています。昨年の3.11の後には宮城県に行き、青森に行き、帰ってまいりました。

今、豊岡が開きつつある新たな扉はこれです。環境経済戦略。環境と経済は相容れないと堅く信じられてきました。今もまだそうです。しかし、そうではなくて、環境を良くする行動、環境行動によって経済は活性化する。俗な言葉でいうと、儲かる。環境を良くして儲かるなら、もっと環境を良くして、もっと儲けようという欲がわいて、いうならば、経済が誘因となって、環境行動がさらに広がる。私たちは、環境と経済が共鳴する関係を「環境経済」と名づけて、それを広げる活動を続けています。狙いが3つあります。

1つは、持続可能性です。環境行動自体の持続可能性です。環境に良い行動が良いことは頭でわかります。でも、なかなか長続きしません。CO2対策を頑張ろうと思って、小まめに電気を消すぞと思って3日と長続きしない。これが環境行動の厳しい現実です。しかし、環境行動は、長く続けないと、そして仲間を増やしていけないと結果を出すことはできません。そのためには、経済によって裏打ちさ

れることが最も有効である。そのことを言っています。2つ目は、自立です。豊岡のような地方都市も自立を強く求められています。人々の暮らしも財政も経済が支えています。経済を元気にしなければいけない。では、どういふ分野なら経済発展の可能性が地方に残されているのか。その有力な分野が環境だということです。最後は、誇りです。もし豊岡が、環境破壊によってではなく、まさに環境を良くすることによって、経済の活性化を成り立たせているまちになることができれば、私たちは自らを大いに誇りに思うことができるはずで、誇りは、まちづくりのエネルギーになります。豊岡だけではありません。日本がもしそのようになれば、私たちは自分の国をさらに大いに誇りに思うことができると思います。

具体例をご紹介します。豊岡に誘致したカネカという会社の子会社のカネカソーラーテックがあります。太陽電池をつくる会社です。世界中の人々が地球温暖化対策に貢献しようとして、この会社の太陽電池を設置すればするほどCO<sub>2</sub>は減ります。環境が良くなる。そして、この企業は儲かります。税収も増えます。雇用も発生します。そして、得られた利益をさらなる研究開発に投資すれば、より高効率で、より安価な太陽電池ができて、地球温暖化対策は進む。環境と経済の共鳴です。今、このカネカと組みまして、豊岡市内にメガソーラー第1号をつくっています。

これはオークという豊岡の杭打ち専門の会社です。廃タイヤ対策を考えました。地面に穴を掘って、廃タイヤをドーナツ状に重ねます。今、もっと洗練された技術になっています。これは、地面の中にタイヤの壁がつくられていまして、こちら側を重機でガガッと揺ると、地面の振動がどう伝わるか。何もないときです。振動源から遠ざかるほどに振動は弱まりますが、それほどでもありません。ところが、この技術を導入すると、振動は見事に減ります。既に実用化されています。第1号ですが、大阪府で採用されました。モノレールがあつて、軟弱地盤のところ住宅街があつて、振動に苦しんでいました。この技術を採用しました。振動は半分になりました。廃タイヤ対策という環境行動が振動対策という環境行動になって、この企業はちゃんと営業になっています。環境と経済との共鳴です。

炭焼きの会社もあります。これは大変な作業です。窯の中で炭が焼けますと、炭出しとって、熱い熱い炭を出します。休みながらの半日作業でありました。市も若干の補助を差し上げて、技術開発がなされました。トロッコの中に木を置いて、

そのまま窯の中で焼きます。焼けますと、この線路を伝わって、炭はあつという間に出てまいります。そして、ふたが被されて空気が遮断されて、火はあつという間に消えます。半日仕事が3分でできるようになりました。この技術を開発する前のこの会社の社屋ですが、立派に成長いたしました。炭焼きが進めば進むほど、里山の木は切られます。光が地面に届きます。様々な草が生えてきて、その草を食べる生き物が養われます。あるいは、木を切ると下から芽が出てきて、その芽を低いところでほかの生き物が食べることができます。つまり、里山が豊かになる。この会社は炭が売れてハッピーになる。環境と経済の共鳴です。

これは豊岡が誘致したベンチャーです。天然成分由来のものを使いまして、凝集分離剤をつくりました。例えば、うどんやラーメン、スパゲッティを茹でると、でん粉の入った後の有機物の入った汁が残ります。これをそのまま自然界に流しますと水質汚染になります。オクラからとった成分を入れて10分間寝かせますと、きれいに固まります。水は流すことができます。これは有機物ですので肥料になります。これも環境に良いことをしながら儲けるという一例です。

もちろん、農業は決定的に重要です。最後にコウノトリにとどめを刺したのは農薬でした。しかし、だからといって、農薬はけしからんというだけでは何の解決にもなりません。なぜか。日本はモンスーンアジアにあります。暑い夏に大量の雨が降ります。例えば梅雨です。光と水に恵まれることが光合成の条件です。日本では盛んに光合成が起きて、草はあつという間に生えてきます。虫もわきます。日本の農業は草との戦いと言われてまいりました。農薬はあつという間に草を殺します。虫を殺します。農家から重い労働を省きました。収量を安定させました。したがって、日本の農家が農薬に飛びついたのは、実は極めて合理的な態度でありました。そこで、農薬はいかんというのであれば、私たちは2つのことを同時にする必要があります。1つは、農薬を使わない、あるいは減らしても、何とか比較的楽にお米がとれる、野菜がとれるという技術体系、農法を確立すること。もう一つは、とはいっても、農薬を使うよりも手間暇がかかります。手間暇がかかった農産物をちゃんと消費者が高く買う仕組みをつくること。豊岡はその両方をやってきました。米づくりについて、コウノトリ育む農法が豊岡で確立されました。全国の有機農業家が育ててきた要素や技術を豊岡に取り入れて組み合わせたものです。これはそのう

ちの虫対策です。農薬を使わないと、稲にウンカ、害虫がつかます。しかし、クモが大量に発生して、ウンカを食べます。クモをカエルが食べます。カエルを蛇が食べます。蛇やカエルをコウノトリが食べます。この自然界の食べたり食べられたりする関係を農薬に置きかえていこう。例えばそういう農法です。よくご覧下さい(映像)。カエルがカメムシを食べています。カエルが沢山いる田んぼではカメムシの害がない、あるいは少ないと言われていました。コウノトリ育む農法には、ちゃんと要件があります。例えば、環境配慮として、農薬は削減、無農薬か75%カット。化学肥料は使わない。種子の消毒を、農薬ではなくて、温湯、お湯です。色々な条件があって、これを満たすと育む農法だといえる。このようにしています。

育むというけれども、本当に生き物を育てているのか調べてみました。これは1反(1,000平米)当たりのイトミミズの数の比較です。慣行農法、普通に農薬を使う田んぼで17万匹、育む農法の減農薬タイプで1,324万匹、無農薬タイプで1,896万匹、圧倒的な差です。本当はカエルでやりたいのですが、カエルは逃げてしまいますので、なかなか比較が難しい。逃げないイトミミズでやってみました。イトミミズは、もちろん、他の生き物のえさにもなります。圧倒的な生物量の違いです。

そして、この農法の作付面積ですが、豊岡でも飛躍的に伸びてきました。今年度は251ヘクタールまで増えました。そのうち50ヘクタールほどが無農薬、残りが減農薬タイプです。しかも、このお米は高く売れます。収量の比較です。慣行農法、普通に農薬を使うお米は10アール当たり521キロとして、育む農法の減農薬タイプは490キロ、6%の減、無農薬ですと20%の減。農薬を使わないと、やはり取れる量は減る。労働時間です。慣行農法で10アール当たり22時間、育む農法の減農薬で30時間、36%増、無農薬で54%増。やはり手間暇はかかる。所得の比較です。農家が米づくりだけで何とかやっていこうとすると、最低8ヘクタール要ると言われています。その8ヘクタールの比較ですが、慣行農法は262万5,000円しか入りません。これは費用を引いた後ですから、これが農家の手取りです。減農薬タイプで558万3,000円、212%の増、無農薬ですと227%の増。最近では、有機農業をやると交付金が出ます。それを足しますと、590万3,000円が減農薬、716万円が無農薬。これが所得ということですので、確かに労働時間は農薬を使うよりも長いし、収量も減るけれども、実際、農家の手取りは圧倒的に高い。つまり、環境に良い農業をす

ると、ちゃんと農家は儲かる。そして、環境は良くなる。環境と経済の共鳴です。

豊岡の環境創造型農業ということで、育む農法以外にも色々な有機農業があつて、そのお米は今、全作付面積の32%ですが、私たちは今、10年間で51%、過半数まで増やそうとしています。51には根拠はありません。過半数を制すれば、世の中はあつという間に変わるだろうというくらいのことなのですが。TPPの議論があります。私は反対です。しかし、やられてしまうかもしれない。そのときでも豊岡の農業は生き残っていく必要がある。その戦略として、この環境創造型農業を増やしていこうといった柱を立てています。

例えば、イトーヨーカドー130店舗以上で豊岡のコウノトリのお米を売って頂いています。普通のお米よりも減農薬タイプで約6割、無農薬タイプで10割高く売って頂いています。沖縄でも1県だけで年間100トン、ものすごく沢山買って頂いています。このお米を扱うお店ですが、2005年は59店舗しかありませんでしたが、現在は505店舗まで増えています。例えば、銀座の三越でもコウノトリのお米を今売って頂いています。

コウノトリのお米を使ったお酒も沢山できました。これは、フクノハナという日本中で豊岡の出石しかつくっていない酒米を使ったお酒で、福光屋という金沢の老舗のお酒屋さんがお酒にしました。本当にうれしそうな顔をしております。お米を使ったしょうゆ、納豆、豆腐もできました。お米を使ったバウムクーヘンも非常によく売れています。

観光客も増えました。最近はやり気味なのですが、それでも毎年30万人以上の方がコウノトリの郷公園にお越しになります。増えた観光客による経済効果はどのくらいか。慶應大学の沼田教授らが調査をされて、毎年10億円という調査結果が出ました。この数字はどういう数字か。豊岡の出石、城下町にそばを食べに来られます。1人前800円です。10億円だと125万人前に相当します。コウノトリを空に帰すという環境行動は確実に経済に繋がっているということが言えます。

この豊岡の取り組みは国連でも高い評価を得るところになりました。一昨年、TEEB報告といまして、世界中の研究者が共同して、生物多様性と経済学の報告書を出しました。そして、生物多様性を守りながら経済の活性化に繋げている世界の代表的事例58のうちの1つに豊岡も選ばれました。

これが豊岡の出発点でもあり、到達点でもあります。そもそもコウノトリ野生復帰事業の主体はだれなのか。コウノトリは兵庫県が飼っています。兵庫県が管理団体に指定されていて、県の組織であるコウノトリの郷公園が飼育し、放鳥しました。放鳥主体です。しかし、放鳥主体イコール野生復帰主体ではありません。なぜか。コウノトリ野生復帰というのは、コウノトリが自然界に定着して、自分の力でえさを取り、ヒナが生まれ、そのヒナが自分の力で大きくなって、カップルになって、自分たちの力でヒナが生まれ、そのヒナがまた巣立っていく。その状態を安定的につくり出すことです。そのためには、例えば有機農業を広げる。川や田んぼ等の湿地再生で生き物を一杯にする。環境学習も大切です。環境経済戦略も大切です。それは結局、人間にとっても素晴らしい環境をつくることです。

この事業をやる責任は誰が負っているのか。国ではありません。県ではありません。豊岡市でもありません。それは、豊岡という地域社会そのものです。豊岡という地域にはもちろん国の機関もあり、兵庫県の機関もあり、豊岡市役所もあります。市民もいます。市民の中には農家もいれば農協もあって、経済団体もいて、企業もいて、子供たちもいて、そのみんなから成る、あるいは外から豊岡を応援している人たちも含めて、豊岡という地域そのものが野生復帰の主体です。したがって、私たちは、放鳥する兵庫県に対して協力しているわけではありません。そうではなくて、これは、私たちがコウノトリも住めるまちをつくろうと思うのか思わないのかという自治の問題です。まちづくりの問題である。これが今の豊岡の認識上の到達点でもあります。

#### 4 『小さな世界都市』の市民を育てる

さて、「小さな世界都市」を実現するための3つ目の柱は、『小さな世界都市』の市民を育てる」です。これまでの豊岡のコウノトリをめぐる様々な取り組みによって、豊岡の田んぼの中に色々な生き物が帰ってきました。カエルやナマズやドジョウやフナも帰ってきました。コハクチョウもやってくるようになりました。しかし、豊岡の水田風景に戻ってきたものの中で、私たちが最も誇りに思うものは子供たちです。子供たちがまた田んぼの中に帰ってきました。これは新田小学校の子供たち

ですが、自分たちの小学校区でコウノトリの野生復帰が進み、そして、コウノトリ育む農法が広がっていることを学びました。この農法が広がれば広がるほど豊岡の環境は良くなって、コウノトリにとっても人間にとってもすばらしい。では、どうしたらこの農法を広げることができるのだろうか。子供たちは真っ当な結論に辿り着きます。消費を増やせば良い。では、どうやったら消費を増やすことができるのだろうか、子供たちはさらに議論をしました。ふと見ると、学校の側にコンビニがありました。そこで、子供たちは自分たちの主張を紙に書いて、店長に会いに行きました。そして、コウノトリの絶滅の物語、復活の物語を話した後に、「店長さん、あの中で売っているおにぎりをコウノトリのお米で作ってくれませんか。そしたら消費が増えて、生産が増えて、環境が良くなります」。残念ながら、高いお米であって、店長さんにはそんな権限はありませんので実現しませんでした。でも、子供たちは負けてはいません。次、何だ。学校給食だ。学校給食で使ったら消費は増えるぞ。だれに頼んだらいい？ 市長だということで、子供たちは自分たちだけで私のアポをとって、自分たちだけで私のところにやってきました。これは本当に驚きました。何という行動力、何という論理の確かさ。私は子供たちに約束をしました。2009年の4月から、週5日、学校給食があって、5日とも豊岡のお米にしました。それまでは、4日間は普通の豊岡産のコシヒカリ、農薬を使ったお米です。1日はパン食でした。そこで、パン屋さんに事情をお話して、理解を頂いてパンを止めました。そして、1週間に1回だけですが、コウノトリのお米にしました。さらに、2010年の4月からは、週5日のうち2回をコウノトリのお米にしました。それだけで消費量をご飯茶わん68万杯、水田面積にして10ヘクタール増えた勘定になります。子供たちの行動が事態を動かしました。

昨年、恐ろしい災害がありました。今ご紹介した子供たちの後輩も頑張っています。昨年の8月22日、新田小学校の子供が豊岡市内の小学校に声をかけました。お米をつくっている子供たちです。今年は、このお米を自分たちでは食べずに、被災地に送ろう。そうだ、そうだ、となりました。でも、どこに送って良いかわからない。どうやって送って良いかわからない。市長に聞こうということで、また子供たちが私のところにやってきました。これも本当に驚きました。よくそんなにみんなで声をかけて決めた。それで、南三陸町に送ることを提案しました。今もそうなの

ですが、当時から、豊岡市はずっと南三陸町に職員を派遣してまいりました。子供たちが作ったお米の量からいくと、南三陸町のすべての児童一人一人に4合ずつのお米を送ることができることがわかっていました。子供たちに「南三陸はどう？」といったら、「それで結構です。いいです」と言いました。そこで、さらに子供たちにこう言いました。「もうちょっと頑張ってみない？ だって、このお米を送るのにお金が必要よ。4合ずつ袋詰めをしたら、袋代も要るよね。みんなで頑張って、それでも駄目だったら、最後は豊岡市役所がみてあげるよ。」「はい」といって帰っていきました。かなりげげんそうな顔をして帰っていきました。その後、さらに子供たちは議論をして、まず、運送会社に行きました。「おっちゃん、これだけのお米を南三陸に送るのに幾らかかる？」「3万円ちょっとだね」。JAに行きました。「この袋は幾ら？」「1つ30円。全部で10万円ちょっと。」「両方足すと13万円だな」。そして、運動会などで募金活動をし、空き缶を集めてお金に換えて、11万円が集まりました。そして、収穫がなされて、11月15日、夕暮れの中、子供たちの万歳の中をお米は南三陸町に行って、子供たち一人一人のメッセージとともに、すべての児童に一人ずつお米が渡りました。考えることと行動することの間には長い長い距離があります。子供たちはさっさとそれを乗り越えていきました。「小さな世界都市」の市民のまず最初の資格は、さっさと行動すること。

これは南極昭和基地のペンギンです。実は豊岡は、世界的冒険家・植村直己のふるさとです。植村が最後まで夢を果たせなかった場所が南極です。うちの職員が私に何の相談もなく、国立極地研究所に行きました。「そういうことですから、うちの職員を派遣させて下さい」。今、越冬隊の一員として、豊岡市の職員が南極に行っていて働いています。

ついこの間、8月30日、市民会館に5年生を集めて、南極授業をやりました。衛星回線を使って、子供たちと昭和基地の隊員たちと色々なやりとりをしました。子供たちから事前に出された質問、「昭和基地の外でしゃぼん玉を膨らませると、しゃぼん玉はどうなりますか。」「ちゃんと実験しましたので、映像をごらん下さい」。フワッと浮かんだしゃぼん玉はやがて白く凍って行って、ポトンと落ちて、ペチャッと壊れました。「これが答えです」と。「南極には郵便局がありますか。」「あります。」「えーっ」といったことをやっておりました。会場の外には、国立極地

研究所から頂いた2万年前の水を置いておりました。みんな触ってから、ちゃんと匂いを嗅いでおりました。自分たちは豊岡という片田舎に住んでいるけれども、豊岡にいるからこそ、直接に南極と結びついた。そういう意識をもってほしいという願いを込めています。

宇宙船「こうのとり」が実現しました。JAXAが無人の宇宙船を打ち上げました。国際宇宙ステーションに食料と水を届けるのがミッションです。その無人の宇宙船に「こうのとり」という名前がつけました。宇宙が身近になりました。しかも、この「こうのとり」を打ち上げたH-II Bロケットのパネは、豊岡の工場で作られたパネです。さらに宇宙が近くになりました。さらに調べてみると、JAXAには、国際宇宙ステーション担当の研究者で、豊岡出身者がいることがわかりました。今、順次帰ってきてもらって、子供たちに宇宙開発教育をして頂いています。自分たちは豊岡という片田舎にいるけれども、豊岡にいるからこそ、直接に宇宙と結び付いたという意識をもって貰おうという願いです。

つまり、「小さな世界都市」の市民、子供たちをどう育てるか。まず、豊岡のことをよく知っている。だから豊岡が大好きだ。だから、豊岡の一員としての役割をちゃんと果たす。例えば、地域の清掃活動に出かけたり、祭りに参加してだんじりを担ぐ。そういったことで良いのです。そのように地域に深く根差しながらも、想像の翼、空想の翼、行動の翼は世界に羽ばたく。これが「小さな世界都市」市民だ。そういった子供を育てようということで、今、一生懸命やっているところです。県にも働きかけてまいりまして、2014年、豊岡市内に大学院ができることになりました。1学年12人、修士2学年24名と小さな大学院ですが、コウノトリやジオパーク、あるいは地域課題の解決といったことをテーマにする大学院ができることになりました。小さな拠点ですが、知の拠点が豊岡にできるということで大変喜んでいきます。

## 5 情報発信戦略を進める

「小さな世界都市」を実現する4つ目、「情報発信戦略を進める」です。知らなければ存在しないのと一緒です。もちろん、私たち個々人は、人に知られようと知られまいと、存在するだけで価値があります。しかし、私たちは、豊岡に沢山の

人に来て頂いて、まちを元気にしたいと思っています。知らなければ、行き先としても選択肢にすら入りません。知って貰おうと。JR西日本に働きかけまして、特急「北近畿」の名前を変えて頂きました。特急「このとり」。半分だけですが、この際ということで車両も新しくして頂きました。新幹線が新大阪駅に近づきます。そうすると車内で放送が流れます。「特急『このとり』城崎温泉行き何時何分発は何番線から出発いたします」。それがすべての接続する新幹線に流れますので、そのPR効果を狙いました。JR有楽町駅前の東京交通会館の1階に、7.5坪の小さなお店ですが、豊岡のアンテナショップを出しました。豊岡の商品を買って頂いて、豊岡を知って頂こうという狙いです。斜め前に北海道、反対側に大阪の巨大なお店がございまして、その間に7.5坪の小さなお店。私たちはコバンザメ商法と呼んでおりますが、ぜひまた覗いて見てやって下さい。三省堂にブックカバーを提供しています。今、ちょうど10月の1ヵ月間、東京にも、例えば東京交通会館に三省堂がありますが、文庫本のブックカバーを豊岡市が無償で提供しています。その代わり、市はPRになる。これは第4弾です。

(「サザエさん」のテーマソング場面のビデオ上映)

これは、2年がかりで豊岡市がフジテレビにアタックして実現しました。ただ、豊岡だけでは駄目だということでしたので、豊岡の周りにも出して頂いて、神戸も止むを得ず2つほど出して頂きました。これは春バージョンでして、4月から6月まで今のが流れました。7月から9月までは夏バージョンが流れておりました。もう終わりましたが、これも情報戦略として取り組んでまいりました。

NOMO BASEBALL CLUBの誘致をいたしました。野茂さんが社会人野球チームをつくっておられます。プロ野球のエリートではないのですが、プロを目指している若者がいます。チャンスを与えたいということで、身銭を切って、NOMO BASEBALL CLUBという社会人野球チームをつくって、大阪府の堺市で活動しておられました。ところが、その球場に高速道路が通ることになって、移転せざるを得なくなりました。そこで、野茂さん側に働きかけをして、今年の暮れには事務所が移ってきて、来年の春には選手が移ってまいります。豊岡に市民球団ができます。実は、野茂さんに豊岡を紹介して下さったのは奈良県の女性でありまして、この方はコウノトリのファンでありました。たまたま堺市に行って、自分の上司が野茂さんのチームの監督

の先輩だったこともあって、野茂さんに会いに行ったら、ちょうど野茂さんがおられて、行き先を探しているということで、それなら、ぜひコウノトリの豊岡を、と言って頂いたのがそもそもの始まりです。社会人野球ですから、選手は生活費を稼ぐ必要があります。城崎温泉の旅館に勤めて頂いて、夜、生活費を稼いで頂く。住み込みをすれば部屋代は要らない。お風呂は温泉だ。昼間は野球の試合をしたり、練習をしたりするということで来て頂くことになりました。これもコウノトリから頂いた縁でありました。

1960年、52年前、豊岡市内で撮られた写真です。農家の女性と7頭の但馬牛、12羽のコウノトリ、この距離で暮らしていました。この女性は一昨年、99歳でお亡くなりになりました。20年ほど前に、私たちはこの女性を突きとめました。そして、市の職員と新聞記者がこの女性にインタビューに行きました。20年ほど前です。ところが、この女性は、そんな三十何年も前の写真、しかも後ろ姿で、自分かどうかわかりません。「でも、多分私でしょう。なぜなら、この隣の牛はうちの牛です。」1軒の家に仲よく暮らしていた時代がありました。そして、この女性は、コウノトリの話はほとんどされずに、ひたすら牛の話をされて、最後にこう言われたのだそうです。「あのころは心が本当に豊かでした」。

私たちが何を失ってきたのか、何を取り戻そうとしているのか、この写真が象徴的に示しているように思います。そして、冒頭、1枚だけご覧頂いたあの恐ろしい水害の写真と重ね合わせて考えるときに、この写真は同時に、私たちはどのように自然と共生できるのか、その問いを突きつけているように思います。豊岡は、豊岡の答えを求めてまいります。

1960年、52年前の写真です。2007年10月、同じ場所です。ここまで戻ってきました。しかし、まだここまでしか戻っていません。同じ場所の最近の写真です。写真ではこの辺りなのですが、ここは田んぼでした。国土交通省にお願いして、全部買収をして頂いて、今、湿地に戻す作業をして頂いています。そして、ぜひここにもう一度、コウノトリと牛と女性の写真の姿を再現したいと思っております。

これは別の場所、2008年10月、円山川です。これはほとんどまちのど真ん中です。国土交通省が治水に役立てるために河川敷を掘り、しかし、浅く掘って自然にも配慮をした場所です。15羽のコウノトリが降り立ちました。野生で絶滅した動物を人

間が増やしていった、もう一度、野に帰した例は、世界で数例の成功例があります。それは全部原生的自然です。こういった人里のど真ん中に帰した例は、コウノトリが世界で初めてです。

というこれまでの長い長い物語を3分30秒にまとめてみました。

(ビデオ上映)

結局、豊岡の私たちを野生復帰に向けて突き動かしてきたものはこれです。命への共感。人間とコウノトリと姿形は違いますが、同じ命だ。その共感こそが、豊岡の野生復帰に向けた原動力であったと思っています。今年6月、豊岡市は「いのちへの共感に満ちたまちづくり条例」というものをつくりました。命への共感に満ちたまちをつくり上げたいと願っています。皆さんのそれぞれの地域で、色々な命が溢れることを心から期待いたしまして、私のスピーチをとりあえず終わらせて頂きます。どうも有難うございました。

## 質 疑 応 答

### (1) 中山里美氏の質問

**中山** 心の温かくなる取り組みのお話を、有難うございました。コウノトリといえば、赤ん坊を運んでくるという、夢のある鳥です。また、あの壮大な姿は素晴らしいと思うのです。質問は二つありまして、一つはここまでの取組でコウノトリの野生復帰までにもってらっしゃったのですが、さて、次、将来に向かって、どういう方向で、どういう計画をお持ちであるかということです。もう一つは、コウノトリのお米が売れると、1キロ当たり1円のコウノトリ基金がありますが、今後の取組みとして、この基金をどのように活かしていくか。その積み立て環境保全と経済という問題が生まれてくると思うのですね。そこのところをお聞かせ願いたいと思います。

**中貝** まず、これからどうするかですが、大きく2つあります。1つは、豊岡の中をどうするかということと、もう一つは、日本をどうするかということです。

豊岡の中というと、例えば農業は、減農薬は収量がほぼ安定してきましたが、無

農薬はまだ20%ぐらい収量が少ない。農家も取り組む割合が小さいので、技術をもっとちゃんと開発して、全体を減農薬よりも無農薬の方向へもっていく。そのためには技術開発も必要ですし、農家の意識を変えて貰うことも必要です。それから、実は、野生化したとはいいいながら、多くは舞い戻って、コウノトリの郷公園の仲間のえさを横取りしているのがあります。つまり、豊岡の自然はまだ十分には戻っていないということです。本当に昔のように、えさをやらなくてもちゃんと棲むように自然を戻していく。そのためには、これも人々の意識を変えていく必要がありますし、どうすれば自然が戻ってくるのかという技術や考え方をきちっと取り入れていく必要があります。さらに、豊岡にはまだ大学はありません。大学院はもうすぐできますが、実践が先行していますので、知との相互作用、つまり、研究者の方々に豊岡の実践をフィールドとしてみて頂いて、これは効いている、これは効いていない、なぜこれは駄目だったのかといった分析をして頂くことによって実践が前へ進む。そのことによって知の側が刺激を受けて、知と実践の共鳴のようなものをつくり上げていく。豊岡の中としては、これが次の大きな課題だと思っています。

日本というのは、そんな壮大なことを考えているわけではありません。千葉県野田市のように、放鳥計画を持っているところがあります。ところが、そういったところは、どうして良いかわからないということがありますので、先輩格である豊岡から、こういったことが重点ですというアドバイスを差し上げることが必要なのですが、豊岡も、実践だけは進んでいます。先ほど言いましたように、知の部分はまだ弱いということがございますので、関係者の方々というか、しかるべき専門家と豊岡の実践とをもう一度合わせてみて、これから日本でコウノトリの野生復帰をしようとするときに必要なことは、第1弾としてはこう、第2弾としてはこうというお手本になるようなスタンダードというか、プログラムというか、そういうものをつくり上げる努力をする責任が豊岡にあると私は思っています。その結果として、日本中にコウノトリが棲むようになれば、豊岡の値打ちは下がりますが、とても愉快だなと。値打ちが下がるというのは、その優位性が失われるという意味ですが、そうなったらとても素敵だなと思いますので、その責任を果たしていきたいと考えています。

もう一つ、1キログラム当たり1円の基金ですが、全部にあるわけではなくて、

幾つかのお店、例えば、兵庫県内のトーホーストアというところなどは、色々なところと組んで、サントリーの缶ビールを1缶買うと1円とか頂いて、コウノトリ基金に積み立てています。年間1,000万円強ぐらいの寄附を頂いていますが、大体それに近い金額を使っています。例えば、今、ビオトープ水田を小学校区に1つはつくろうということで、順次、進めています。でも、ビオトープ水田は、管理をしますので、管理費が要ります。つまり、人件費が要る。そういうものに基金を使わせて頂いて、ビオトープ水田をあちらこちらにつくって、自然を豊かにするだけではなくて、子供たちの環境学習の場にする。そういったことをしています。あるいは、学校給食で普通のお米より高い部分のほとんどは市の税金で賄っていますが、一部は頂いた基金を使わせて頂いています。そこで消費が増えれば生産が増えて、コウノトリの生息場所が広がるということで、そういうものに使わせて頂いたり、コウノトリも暮らせるまちをつくるということに基金は使わせて頂いています。ただ、例えば、先ほど、牛とおばちゃんがいた場所がありましたが、あそこも今、湿地にしていますが、ここを管理しようとする、草は定期的に刈ってやらないといけないし、生き物がどう変わるかというモニタリングをする必要があります。そこには費用が発生しますので、そういうものに充てていこうとすると、今のレベルでは少し足りない、さらにご理解を頂いて、基金を増やしていきたいと考えているところです。ざくっとそんなところでよろしいでしょうか。

## (2) 西尾道德氏の質問

**西尾** 大変良いお話をお伺いしました。ものすごく息の長い取組みをされて、ちょうど平成になったころに新しくヒナが誕生して、やっと今日に至っているわけです。ちょうどそのころ、つくばにある研究所で、鳥の研究者が「豊岡のコウノトリの復活の委員に委嘱されようとしているのですが、受けて良いか」と言ってきました。当時、私はその研究所の研究企画科長をしていまして、「行け、行け」と言ったら、「今度はヨーロッパに視察に行けと言うのだけれども」と相談があって、それも「行け、行け」と言った。それだけすそ野の長い取組みを長い期間やられて、果たしてコウノトリが野生復帰するのか、それが復帰したところで、狙ったような環境と経済の両立が図られるという実証もないのに、よくぞこれだけ長い間、豊岡

市として、その使命感をもって、組織を束ねてこられたものだと感心しました。その辺のご苦勞をお聞かせ頂けると有難いのですが。

**中貝** 答えるのはとても難しく、でも、答えるのが楽しいような質問を頂きました。私に関していえば、苦勞はありませんでした。飼育員は、長い間、苦勞があったと思います。外も歩けないくらい情けない思いで過ごしたと言っていました。私は、コウノトリが生まれてからこの仕事に関わりましたので、苦心は一杯しました。いかに人にその気になって貰うとか、兵庫県知事をどう説得するかとか、色々な手練手管も使ったり、苦心はしましたが、苦勞とは一つも思いませんでした。それはとても楽しかったからです。確実に前に動いているという実感があったり、自然というのは不思議なものでして、私は法学部で文科系なのですが、学べば学ぶほど自分が賢くなっていくような気がするのですね。何か自分の目が見開かれていくような気がして、それ自身がまた次への推進力になってきました。この仕事そのものにはおもしろさがあった。わくわく感もありました。

ただ、コウノトリの野生復帰は、スタートのときから中心線がすごくはっきりしていました。「コウノトリも」の「も」の一言の発明です。これは自分で自分を褒めたいと思っているのですが、「コウノトリが」といった瞬間に、多くの人々は背を向けていきます。なぜ人間がコウノトリのためにそんなことをしなければいけないのか。私もさんざん言われてきました。人間とコウノトリとどっちが大切かと。県会議員だったころは「コウノトリ議員」と呼ばれ、市長になってから「コウノトリ市長」と呼ばれましたが、褒められていると思ったら、揶揄されておりました。

そこで、「コウノトリも」という言葉をこのスタートのときに発見してというか、そういったことを教えてくれる人がいて、コウノトリばかりを見てはいけない、コウノトリを支えるビオトープを見なさい、ということを経営者に随分言っていたのです。それが「も」という言葉になりました。そうすると、多くの人々は、ああ、自分のことかと。その「自分のことか」は、最初は環境問題と自分のことだったのですが、経済が入ることによって、さらに広がりを持ちました。でも、最初からそんなことが全部わかっていたわけではなくて、とにかく最初は「も」という言葉だけがあって、少しずつ動いているうちに景色が広がっていったということです。ですから、おもしろかった、楽しかった、それから、中心線がしっかりしてい

た。さらに、なぜあなたはこんな道に進もうと思ったのかというのは、ほろっときてしまったのです。24年間、来る年も来る年も駄目であって、でも、やっとヒナがかえって、その2年後に飼育員に初めて会いました。その飼育員が、野生に帰りたいという夢をずっと持っていたというわけですね。それまでの彼の長い努力をみてほろっときて、それならその夢と一緒に叶えたいと情の上で思ってしまったことが原動力であったような気がします。

なぜコウノトリがここまで広がったのかというご質問を一杯受けるのですが、結局わからないのです。でも、多くの方がおっしゃるのは、情熱が伝わっている。私も政治家ですが、例えば、政治家から誰かに伝わる。あるいは飼育員から誰かに伝わる。農業者に伝わって、農業者がまた別の農業者にその情熱を伝えていくという情熱の伝播みたいなことが起きていって、結果として、色々な分野の人たちが、何か知らないけれども、コウノトリが空に帰るといいなと思いながら動き始めていった。これはあくまで結果論ですが、そういうことが言えるのではないかと思います。それと、ちょうど時代がぴったり合ってきたということも背景としてあるのではないかと思います。お答えになったかどうかかわからないですが。

### (3) 小澤健二氏の質問

**小澤** 今日お聞して、命への共感というテーマを含めて色々な意味でいたく感心させられました。これと関連して小学生の色々な活動の話がありましたが、小学生がこのような様々な活動をされているのは、それを支える意欲的な学校の先生がいて、その先生達が共感をもって支えているのでしょうか。全く小学生の自発的な行動だとすれば、これは驚くべき素晴らしいことだと思われる。小学生の活動に対する学校の取組みあるいは、それを支える先生との関係について教えて頂ければと思います。

**中貝** 実は私もそこは結構謎で、色々考えてみたのですが、今日お話しした以外でも、小学生は一杯いますので、千差万別です。ただ、学校給食についてのスタートは子供たち自身でした。あの子供たちの小学校区は台風23号で泥の海に沈みました。学校も泥の海に沈み、子供たちの家も、多分、3分の1ぐらいは浸かってしまったと思います。そのときに全国の人たちに、ボランティアに助けて貰った。そこ

で、自分たちは今度いつかお返ししたいということで、ボランティアでお返しする会をつくりました。ただ、そんなにタイミングよく、ほかのところで災害が起きるわけではないし、起きても子供たちはなかなか行けない。少し方向を変えて、あの台風は、人間と自然との関係に何か問題があったのではないかとということで、自然のことを勉強する会に変わっていきました。そのころから、その小学校にいた先生がうまく支えたということがありました。でも、基本は、子供たちが自分たちでどんどん勉強し、あるいは農家の話を聞き、また、普及員で、育む農法を普及してきた職員の話を聞いたりして、自分たちで膨らませていったということです。

それと、子供たちが市長に会いたいと言ってきていますと言ってきたときに、私はすぐ受け入れて、何とか実現しようと思っていました。世の中には、子供たち、あるいは大人でもそうですが、動いても何も変わらないことが一杯あります。でも、動けば変わり得るという経験をさせたいという思いを私自身が持っていましたので、何とか学校給食に使える道はないかということで考えて見たということもございました。さらに、地域です。先ほどの子供たちの小学校区は地域がとても偉いのです。大人たちも、大水害に遭っていますし、力で押し込めようと思っても、とても自然には叶わないという経験を強烈に持っています。その意味では、賢く生きるということ地域みんなが持っています。後でびっくりしたのですが、新田というところで環境会議をやるから来てくれといったら、大人たちが順番に、自分の地域のすてきな風景はこれだということをパワーポイントで教えているのですね。みんなに言っています。子供たちがやるのはよく見るのですが、大人たちが、新田という小学校区の中の自分の村は、山のここが素敵だとか、この花が好きだということを言っている。そういう姿子供たちが見ているということで、大人たちから言わせると、子供たちが自分たちを変えたというのですが、大人たちのその姿がまた子供たちに影響している。非常にうまい相互作用が起きてきているような気がします。

その地域地域によって、先生がリードするところからスタートするところもあれば、さっきのように、子供たちからスタートするところもあって、それは本当に色々なのだらうと思っています。ただ、私は、とにかく子供たちに、動けば変わり得るという経験をさせたいということをいろいろな場面で思っていて、子供たちが会いたいといえ、基本的には最優先で会うことに私自身はしています。

#### (4) 中川昭一郎氏の質問

**中川** 色々なお話を聞いてありがたく思っておりますが。私は水田の圃場整備の研究をやってきた人間で、今後、えさ場としての水田をどう整備していったら良いかについてお考えと経験をお聞かせ頂けたらありがたいのですが。豊岡は日本で最初にこういう自然復帰のことを始められたので有名になられ、その後、佐渡のトキの問題が出てきて、佐渡は、豊岡の先例があったから、随分助かったのだらうと思います。豊岡へはまだ行ったことがないのですが、佐渡は2度ほど見る機会がありました。佐渡では、ドジョウがちゃんと棲めるような場所も水田の圃場整備の事業の中に組み込んでつくっているようなケースが出てきていた。今日見せて頂いたスライドその他では、国土交通省がやられた河川敷の中のウェットランド造成など、非常に効果が上がっていることはよくわかったのですが、田んぼ自体がえさ場になるようなことのために、農薬節減以外に、どういうご努力をなされたのか、その辺を聞かせて頂ければと思います。

**中貝** その辺も豊岡が色々工夫をしてきたところであります。例えば、これは佐渡でもそうですが、江などを設けています。田んぼの中にわざわざ畦をつくって、その周辺の細長いところを少し深く掘っておいて水を貯めると、中干しで田んぼから水を抜いても、そこだけは水が残りますので、そこに魚は逃げ込んでいくことができます。ところが、そこに集まりますと、今度は鳥の格好の餌食になりますので、シェルターといいまして、何か所かに橋のようなものを板でかけてやりますと、そこに逃げ込むことができるといったこともやってまいりました。また、先ほどちょっとご紹介した、水田魚道をつくるようなことを進めてきた。あとは、田んぼと水路と川との連続性をつくっていく。そういう努力も重ねてきました。水田魚道は、しっかりやろうとすると、お金が結構かかるのですね。コンクリート製のものをつくったときにどうなのか、あるいは木でつくったときにどうなのかといったこともやってきた。田んぼの構造としては、そういうことかと思えます。

ちなみに、ご質問と離れるのですが、コウノトリは害鳥だと言われてきました。苗を植えた後、入ってえさを取りに行くと田んぼを踏み荒らす。農家からは、害鳥だといって総スキャンでありました。調べて見ました。これは私が言ったのではなく、

職員が勝手に調べたのですが、野生のコウノトリ、ハチゴロウがやってきたときに、朝の4時半から夕方の5時まで、1週間、毎日交代で、ハチゴロウが田んぼの中を何歩歩いて、何株踏みつけたか。そうすると、数字は忘れてしまいましたが、ほとんど問題ないぐらい。1万何千歩か歩いて、せいぜい40株ほど踏みつけた。踏みつけられて、それは駄目になっても、隣の稲はその栄養分をとりますから、収量には影響がない。したがって、実は、コウノトリは害鳥ではないという最初の発見がありました。

次に、今度、放鳥したコウノトリを同じように1週間調べてみました。同じような結果が出たのですが、踏みつけられた稲はどうなったかを調べてみました。ちゃんと元に戻っておりました。したがって、コウノトリは害鳥だというのは迷信だということがわかって、安心して、田んぼ自体をコウノトリのえさ場にしても良いという証拠が得られて、その上で、ご質問頂いたような、水田魚道や江をつくるようなこともやってきた。そんなところでございます。

#### (5) 田中洋介氏の質問

**田中** 儲ける話なのですが、実は私、兵庫県の肥育農家をまえに調べたことがあるのです。肥育して、高い値段で成功している農家は、自分の田んぼで、米というよりは、良い稲わらをつくって食べさせることをやっておりますし、田んぼが余らない人は、出来秋に一生懸命稲わらを集めている。そういう人が高い値段を実現していて、北朝鮮や台湾から輸入したガラガラした稲わらを食べさせている肥育農家では、牛の目が見えなくなったといった病気を出しているということで、決め手は稲わらなのです。それで、コウノトリ共生農法で苦労してつくった米の話は出たのですが、稲わらがすごく良いのではないかと思うのです。お宅の伝統的な但馬牛とコウノトリ共生農法の稲わらを結び付けて、上質の肉だということで、城崎温泉などで高い値段で食べて貰うということで儲けて貰えないかと。もう一つ、さっき、農婦と但馬牛とコウノトリの写真がありましたが、あれなどを活用して、儲けられたら良いのではないかと思ひながら話を聞きました。

**中貝** 儲ける話にはとても関心があります。実は、豊岡も含め、但馬は但馬牛の産地です。但馬牛は子牛です。優れた血統の子牛を生産して、それを松阪や神戸な

どに売って、そこで肥育して、例えば松阪牛になる。生きているときは牛（うし）でして、肉になると牛（ぎゅう）になります。豊岡も含めてですが、但馬は、但馬牛は余り得意ではありませんでした。つまり、肥育は肥育の特別な技術があつて、それは神戸や松阪などに負けるということがありましたが、子牛を50万、100万で売って、聞いてみると8,000万円で売れるのだったら、そっちの方が良いということもあつて、肥育をやろうという動きも少しずつ出てきておりますので、稲わらがどうなのかわかりませんが、一度持ち帰って、これがいけるのだったら、コウノトリのお米のわらを食べさせようということにして見たいと思つています。豊岡は牛を飼っているところも結構あるのですが、円山川の河川敷を安く借りて、そこで牧草を育てています。そうしますと、川の管理者からすると、高水位のときの管理として、土のままよりも良いということがあり、農家の側は、牧草をわざわざ外から買ってこなくても、すぐ目の前でできるというメリットもあつて、牧草を円山川の河川敷に植えて育てるといった方法をとつておりますが、確かに、今、稲わらはほとんど捨てておりますので、そういうのに活用が可能かどうか、一度、専門家に聞いてみたいと思つています。

#### (6) 岸 康彦理事長の質問

**司会** 最後ですが、岸理事長は、このコウノトリ問題について、色々論文などを書かれていますので、理事長、お願いします。

**岸** 私が住んでいるところの隣は千葉県の野田市なのですが、コウノトリが関東へ広がっていく可能性は相当あるとご覧になっていらっしゃいますか。かなり全国へ行っているようではありますが、野田市は非常に熱心です。それから、鴻巣市も頑張つてやりたいと言つています。

**中貝** 鴻巣はコウノトリの会がお有りになって、平均年齢69歳か70歳ぐらいですが、もう一度、コウノトリを空に帰すといつておられます。今、関東では野田が一番先行しております。あとは、渡良瀬あたりで、コウノトリを空に、という動きがある。今、野田が先頭を切つています。私は実現すると思つています。特に野田は、これまで、谷津田というか、中の田んぼを守るような努力を随分されてきて、有機農業も随分広がってきて、豊岡方式でJAをかませている。普通、農業を使わない

のかとって、農協と有機農業とけんかするのですね。農家は農家で結構偏固な人が多いから、けんかしたのですが、豊岡はJAがコウノトリ育む農法を育ててきました。今、野田も、野田のJAと有機農業をやる人たちの関係はすごく良いので、流通の側がちゃんとバックアップできるという意味では物すごく有利だと思っています。それから、市長がやる気満々です。この間の市長選挙でも、コウノトリを空に帰すという派と反対派とが戦って、帰すという市長が勝たれましたので、そういう意味ではとても良いと思います。ただ、1羽や2羽、多摩動物公園から借りてきて放しただけでは、ひょっとしたら、そこでカップルはできるかもしれませんが、では、そこで生まれた子供はだれと結婚したら良いのだと考えると、継続的に新しい血のコウノトリを放鳥するというバックアップ体制が必要ですので、そのような体制をどう築くかということが大切だと思います。ただ、多摩動物公園にもコウノトリが一杯いますし、多摩と豊岡との間でもやりとりをしていますし、韓国でも随分増えてきていて、豊岡のコウノトリは向こうへ行ったりしていますから、そういう国際的なやりとりをしながら、バックアップ体制をつくっていく。それから、研究者もちゃんとフォローしていくということができれば、そう遠くない時期に、関東の空に再びコウノトリが舞うのではないかと私は思っています。ですから、ぜひ頑張ってくださいと思いますし、鴻巣もそう遠くない時期に……。何なら野田で飛んでいたのが行っても良い訳でありますから、そのようになれば、日本は楽しいだろうなという気がいたします。

——了——